

「NDCの日」に間宮商店跡地を訪ねる

藤倉 恵一

2017年8月25日、筆者は大阪にいた。翌日から新大阪でTP&Dフォーラム2017（第27回整理技術・情報管理等研究会）が開催されるのにあわせての「前乗り」であったが、この日、大阪に行くことにはもうひとつ理由があった。

8月25日は、『日本十進分類法』（NDC）にとって特別な日である。合資会社間宮商店からNDC第1版が刊行されたのが1929（昭和4）年のこの日であり、編者もり・きよしの23歳の誕生日であった。そしてもりの没後最初に刊行された新訂9版の発行日もまた、1995（平成7）年のこの日にあわせている。

筆者はこの8月25日を「NDCの日」と勝手に呼んで、NDCのさらなる普及の一環にできないかと目論んでいる。

筆者は現在、NDC史を主に研究している。その過程において、当時間宮商店があった所在地についても調べていたが、大阪の地名は当時と現在で異なっており、正確な位置は役所等で調査をするか、昭和初期当時の番地まで記入された地図を調べるほかなかった。なかなか地図が見つからなかったのだが、先日、「国立国会図書館デジタルコレクション」（図書館送信資料）において昭和6年・9年の地図を発見し、ようやく番地の特定に至ったのである。

1. 間宮商店創業の地 （大阪市北区木幡町21）

間宮商店の店主（社長）の間宮不二雄は、1921（大正10）年に大阪市北区本庄中野町（現在の北区本庄東）でタイプライターや計算機、目録カードを主に扱う「M・フヤセ商会」を創

業し、同年のうちに、大阪市西区江戸堀に事務所を借りている。

そして本格的に図書館用品を扱うようになったのは翌1922（大正11）年のことであり、間宮商店を創業した。その店舗は、もりがローマ字研究会で間宮と出会い、間宮商店に勤めるようになってからしばらく住み込みで働いていたところである。

この場所について間宮の自伝『としよかみ圍とわが生涯』¹⁾に、次のような記述がある。

機械その他が到着すると本庄中野町では狭く又事務所を別に借りているのも不経済の処から、広くて便利な家を物色していた処、梅田新道と南森町の間で電車通りに面した一軒の家が見つかった。間口は六間位で二階建土蔵付、蔵の前はカード截断、野引、印刷の工場に用い、左半分は事務所、材料等は土蔵に入れ得るので直ちに借入れ移転したのが5月下旬であった。

いっぽう、もりは自伝『司書55年の思い出』²⁾に、次のように記している。

新店舗は北区木幡町の電車道に面した家で、オフィス、作業場、倉庫、居宅と、かなり広がったが、初めはテーブルなどと若干の商品のみでがらんとしていた。しかも、店主（私たちはマスターと呼ぶ）は、北区本庄の旧宅からの通勤であり、店には私と先輩のI君が寝泊りをするのみで、三度の食事は近所の弁当屋から取寄せるといって、侘びしさである。もっとも翌年2

月には店主を初め家族が引越してこられて賑やかになり、私たちも通勤となった。

筆者が訪れたこの地は、現在の北区西天満3丁目13付近にあたり、曾根崎通（京阪国道；国道1号線）の南側、西天満交差点と西天満東交差点の中間に位置している。



写真1. 現在の北区木幡町21付近

先年までレンタカー店とタワーパーキングがあったようだが、訪れたときは工事中だった。京阪国道の拡幅でもしかしたら正確な場所ではないかもしれないが、後年の地図と比較すると、おそらくこの場所であろう。

2. 日本十進分類法誕生の地

（大阪市南区安堂寺橋通4丁目5）

間宮商店はその後、事業拡張にともない1927（昭和2）年2月、大阪市南区安堂寺橋通4丁目5に移転した。ふたたび間宮の文章を引用する。

事業は年を追うて隆盛に趣き、横尾重之氏（写真師で私が丸善大阪支店に居た時以来の知人）の紹介で、桑田写真材料商が心才橋筋に店舗を移すに当り、旧住所兼店舗であった南区安堂寺橋通4丁目（後御堂筋角）に、敷地100坪、事務所、洋館三階建、住宅は二階建て8室、奥に絵二階の土蔵付の家も引移ることが出来た。私は大阪で仕事をすることからは1日でもよいから船場とて宿年の望を達することが出来た。

この新しい店舗の2階に、洋の東西を問わず図書館学関係の文献を集



写真2. 当時の間宮商店。手前の道路は安堂寺橋通（間宮『圖とわが生涯』より）

めた「間宮文庫」が置かれた。もりはその整理を担当する中でDDC12版を使いながらNDCの基礎を生み出すに至ったのである。そして3階の会議室は同年11月15日、青年図書館員聯盟の結成の地となり、その機関誌『圖研究』がNDCの原案「和洋圖書共用十進分類表案」発表の場となった³⁾。

この店舗は心齋橋（当時はまだ長堀川に架かる橋であった）にほど近く、市電やバス停が密集する便利な場所であった。大阪市編『地番入大阪市図：五千分一』（昭和6年⁴⁾）によれば、安堂寺橋通4丁目5のさらに西側に4丁目6と7という番地を確認することができるが、当時の御堂筋は24間道路への拡幅と、地下鉄御堂筋線の開通工事が行われており、上の引用にもあるように、ほどなく間宮商店の店舗の位置は、御堂筋と安堂寺橋通りの角に位置することになったことがわかる「御堂筋角」という表現が使われるようになった。

間宮商店の隣に及んだ工事の時期は不明だが、箕島正夫『大大阪市地図：最新番地入』（昭和9年⁵⁾）では御堂筋が拡幅されていることを確認することができる（ただしこの地図上ではこのブロックに「四丁目1～9」という表記しかなく、4丁目5がどこに位置していたかまで確認することはできない）。

この御堂筋線工事の現場では、1933（昭和8）年5月6日、間宮の長男靖之が幼くして墜死している。御

堂筋線の開業2週間前のことであった。

そして、1945（昭和20）年3月14日深夜の大阪大空襲により難波・心齋橋周辺は一面の猛火に包まれ、間宮商店は多くの貴重な文献とともに灰燼に帰した。満州から一時帰国したもりは、同月下旬に大阪を訪れ「間宮商店跡も瓦礫の山、見覚えの金庫のみが形を残していた」と先述の自伝に記している。

2017年現在の当地（中央区南船場3丁目10付近）は、御堂筋（国道25号線）の南船場3交差点北東にあたる。旧間宮商店の敷地とその周辺を含んで、現在は12階建てのビルが建ち、三井住友銀行船場支店などが入っている。



写真3. 現在の南区安堂寺橋通4丁目付近（御堂筋から）



写真4. 写真2とほぼ同じ位置から
当時の間宮商店の刊行物の巻末には、この新店舗の素描入りの広告が



写真5. 間宮商店広告より

しばしば付されていた。

この素描では、安堂寺橋通り（図の正面は御堂筋ではない）に面した店舗の前に、1台の自動車が止まっているのが見て取れる。大正末期から昭和初期にかけて急速に普及が進んだとはいえ⁶⁾、まだ自動車が珍しかったのは確かである。

NDC刊行から88年、間宮商店跡地に立って見渡すと、その周囲はエルメスやルイ・ヴィトン、ティファニーなど華やかな店舗が立ち並ぶ。

往時の間宮商店もまた、大丸百貨店をはじめ多くの商店が並ぶ日本有数の繁華街にあって、華々しく映えていたのではないだろうか。



写真6. NDC発祥の地と、新訂10版

参考・引用

- 1) 間宮不二雄『圖とわが生涯。前期』間宮不二雄、1969
- 2) もり・きよし『司書55年の思い出』もり・きよし氏を偲ぶ会、1991
- 3) 森清「和洋圖書共用十進分類表案」『圖研究』1(2), 1928, p.121-161
森清「和洋圖書共用十進分類表案II 相關索引」『圖研究』1(3), 1928, p.[380]-426
- 4) 大阪市編『地番入大阪市図：五千分一』和楽路屋、1930
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8311418>（図書館送信資料）
- 5) 箕島正夫『大大阪市地図：最新番地入』箕島正夫、1934
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/8312201>（図書館送信資料）
- 6) 奥井正俊「大正・昭和戦前期における自動車の普及過程」『新地理』36(3), 1988, p.30-38
（ふじくら けいいち：文教学校 越谷図書館、JLA 分類委員会委員）
[NDC 10 : 014.45
BSH : 1. 間宮商店 2. 日本十進分類法]